学位論文題名

北東アジア地域における先史から
中世期の地域間交渉に関する考古学的研究

学位論文内容の要旨

本論文は、北東アジア地域における文化的動態を考古学的資料に基づき復元しようとする研究である。北海道島からサハリン島、そしてアムール川流域を含む極東北部地域は、先史時代からヒトとモノの往来が繰り返され、島嶼地域の文化形成に大きな影響を与えてきたことが指摘されてきた。しかしながら、具体的な地域間の文化的動態を検証するために不可欠な基礎的資料の提示については、現在当該地域が複数の国家に分断され、それぞれ異なる言語で研究が進められていること、また地域間に調査の進度に格差を伴うことから多くの困難が存在してきた。そのためこの当該地域の歴史的な文化動態、地域間交渉については、いまだ十分に明らかにされていないといえる。本論文は、未だ編年や文化内容の詳細が十分に把握されていない当該地域の資料に実際に現地足を運んで基礎的整理と分析を加え、土器資料を中心に編年と地域差を明らかにする中で、文化動態の把握と地域交渉の復元を試みたものである。

分析にあたっては資料実見主義に徹し、自ら資料の検討に各地域の研究者の見解や従来の資料への評価を批判的に検討する中で最終的な評価を加えている。この種の研究は、1990年代以降の政治的環境の変化の流れを受け、生じてきている近年の当該地域に調査研究の流れに位置づけることができる。

序章は、本論文の目的と意義について述べたものである。

第1章は、近年資料の蓄積が著しく、その類似性が指摘されている北海道北部とサハリン島南部の土器群に検討を加えたものである。第1節では研究史を概観し、第2節と第3節において具体的に出土土器群についての考察を加えている。結果として生業様式の共通性を背景とした土器製作情報の共有が宗谷海峡を挟んだ地域に行われ、ある種の共通の地域文化圏が形成されていたことを指摘している。その一方でサハリン島側には在地の土器製作技術の伝統やより北方の地域からの別の土器製作技術が波及している点も指摘する。この点に注目して、続縄文土器と鈴谷式土器の間に連続性を認め、この後に当該地域に出現するオホーツク文化を生み出す文化的基盤の素地が、この時期に形成されたことが立証できる可能性を示している。

第2章は、サハリン島中部において近年新たに発見、報告されたザーパトナヤ10式土器とアムール川河口域で発見報告されたバリシャヤ・ブフタ式土器を取り上げ、その型式学的関係を検討している。最初に第1節と第2節でそれぞれの土器の型式学的特徴を現地において実施した観察所見に基づいて分析をおこなっている。サハリン島中央部に分布す

るザーパトナヤ10式土器については、時間差をもった複数型式に細分できることを示し、特にその初期の型式がアムール川河口部に見られるバリショイ・ブフタ式との間に型式学的共通性を有することを明らかにした。この分析結果に基づき、サハリン島中部とアムール川河口部においても、土器製作技術を共有する地域文化圏が存在したことを主張する。この成果は先の第1章における成果と合わせて考える時、北海道北部からアムール川河口部におよぶ広大な地理的空間を対象とした土器型式に基づく広域編年を確立できる見通しを得たものとして評価できる。また詳細な検討の結果共通性ととも、地域的多様性も存在も明らかにされており、文化的動態についてもこれまでの大陸から島嶼部へという一方向的な文化の流れではなく、複数の文化系統の統合と離散による文化の生成と再編成が生じていたことを示唆する結果となったことは今後の研究の進展が期待される結果となっている。

第3章は、アムール川河口部の初期鉄器時代の土器群の整理と考察をおこなったものである。本分析においても、直接ゴールィ・ムイス1遺跡出土土器を実見分析することから周辺土器との関係について新たな知見を引き出している点が注目される。土器群の型式学的属性の検討、ゴールィ・ムイス1遺跡における層位的出土状況に基づき、これまで様々な研究者が断片的に言及し、その系統性、年代的位置づけについて議論がなされてきたコッピ式、ウリル系、サルゴリ式の各土器型式について独自の評価を加えている。その中で従来以上にアムール川河口域がより北方のヤクーツク地方からの影響も含めて様々な地域からの土器製作技術が流入している文化の結節点である状況が示されている。特にこれまで実態の不明であったサルゴリ式土器の型式学的特徴を提示し、他の土器型式との相関関係を明らかにした点は今後の研究に寄与する点が大である。

第4章は、7世紀初頭の極東地域に広く分布する靺鞨罐と呼称される土器群が成立する過程を論じている。現状で理解できる靺鞨罐成立前の資料は、殆どは後漢代から魏晋代であるため、およそ第1章から第3章との併行期にあたる。これまでの研究において、初期靺鞨罐の成立までの変化を検討する研究が少ない点、時空間的な資料の欠落がある点を指摘し、変化の地域性と前代からの系統性を指摘した。また仮説として前代からの系統と地域間関係の存在が母体となって靺鞨罐の広域分布が成立するとみる視点を提供している。

第5章では渤海土器の編年と地域差について検討を加えた。靺鞨罐成立後の「南部」地域の様相である。本稿での検討は、渤海土器の包括的な整理であり、大要を示したに過ぎない。しかし、本稿で取り上げた資料群の中では、日本でも研究人口が多い対象であるものの、先行研究は存在しない。ここで示めされた整理は、今後の渤海研究に対して基礎的な分析作業として位置づけられる。また陶質土器については、靺鞨罐のような従来型の在地生産土器とは異なり、専業集団による集約的生産と分配管理が行われ、国家ないし集団体制のあり方を反映するものであることを想定している。その導入については、起源となる地域の食器、煮沸具などの様式観も色濃く反映されると考えられ、この種の土器の系統関係の把握によって隣接地域(国家)との関係性を明らかにできる可能性を指摘している。

第6章は、アムール女真文化の土器について検討を行った。靺鞨罐成立後のアムール流域の様相である。日本でもオホーツク文化圏に出土することから、注目されていたが、殆ど「アムール女真(パクロフカ)文化」の資料として一括され、どの時期・どの地域の資料かは、問題にされていなかった点を課題として取り上げている。結果、8世紀後半から9世紀初頭における渤海土器の影響を、10世紀代に契丹土器の影響を受け変容を遂げなが

らも独自の変遷を遂げ、少なくとも 12 世紀後半、金代後半期に至るまでその土器製作伝統が残ることを指摘した。

また補論として、宗谷海峡を挟んだ地域の文化的共通性が土器製作伝統のみではなく、生活様式にも込められることを示した補論 1 と、金代の統治と流通の組織化を検討した補論 2 が加えられている。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 加 藤 博 文
副 査 准教授 小 杉 康
副 査 教 授 津 田 芳 郎
副 査 名誉教授 菊 池 俊 彦

学 位 論 文 題 名

北東アジア地域における先史から 中世期の地域間交渉に関する考古学的研究

平成 19 年 12 月 14 日（金）文学研究教授会の承認のもと、上記 4 名をもって本論文の審査委員会を組織し、計 4 回の審査をおこなった。

- ・ 平成 19 年 12 月 14 日 審査委員
- ・ 平成 19 年 12 月 17 日 第 1 回審査委員会

論文のコピーを配布し、各委員が 1) 論文の構成、2) 記述内容、3) 検討資料と結論の妥当性について確認することを打ち合わせた。

- ・ 平成 19 年 1 月 11 日 第 2 回審査委員会

全委員により、論文全体の確認、問題点の指摘を行う。合議の上、1) 字句・用語の訂正点、2) 口述試験における質問事項、3) 構成の変更点をもとめるものを分類整理する。

- ・ 平成 19 年 1 月 28 日 第 3 回審査委員会

申請者の口述試験を実施し、論文内容や視点、用語などの定義について質疑を行う。また研究テーマの背景や関連項目についての申請者の知識を問う質疑を行う。

- ・ 平成 19 年 1 月 28 日 第 4 回審査委員会

学位授与の可否を判定した。

- ・ 平成 19 年 2 月 13 日 第 5 回審査委員会

配布した主査の案をもとに、教授会報告資料最終案を決定

以下に本論文の評価を述べる。

南北に長く連なる島嶼地帯である日本列島においては、その文化形成を論じる際に大陸との文化接触やさまざまな文化要素の流入という視点を軽視することはできない。そのために周辺地域との比較研究が重要であることは改めて指摘するまでもない。しかしながら、日本列島にとって北からのゲートウェイである北海道島からサハリン島、そしてアムール川流域を含む極東北部地域についての先史文化の様相は断片的に知られるのみで、比較研究に耐えうる資料の収集は困難を伴っていた。また当該地域の研究の困難さには、国境を

接する各国の研究資料を公表する言語の多様性が存在した。当該地域に関する情報を詳細に検討するためには、ロシア語および中国語による文献読解が不可欠であるという状況がある。

近年の政治的環境の変化は、国際的な共同研究を可能とし、かつてに比べて相互の情報交流の機会は増加してきている。なによりも海外調査に参加し、文献を通じた資料に留まらず、実資料を検討し、資料批判を行う研究者も出てきた。申請者により研究もこのような新しい世代の新たな研究の流れに位置づけることができる。

本論は、当該地域の土器群について、ロシア語、中国語による一次文献を丹念に比較検討し、また自ら実施料にあたり整理分析することから、具体的に海峡を挟んだいくつかの地域に土器製作技術や共通の土器様式を共有する地域的文化圏が形成される状況、また複数の土器製作技術が交錯し、新たな文化を形成していく状況が存在することを明らかにしている。

このような本論の整理と分析によって当該地域の土器群に関する質的に高い情報があらためて提示されており、今後の当該地域の研究動向に確実に影響を与えることになるであろう。事実、本論の中の幾つかの章はすでに学術雑誌に公表されており、学会においてこれまでの研究の不足点を補う重要なものとして評価されている。

一方で、本論においては、自らの整理分析によって明らかにされた異なる文化的動態の背景、とりわけ第4章において土器製作技術の共有状況が生み出された背景やその社会的側面への影響に関する考察が欠落している。広域な地域圏の成立を象徴する存在として取り上げている一方で、その背景に存在する地域間の関係性については、不明と結論付けている点は、本論文が地域間交渉の解明を目指した論文であることを考慮すれば、今後課題を残すこととなった。

またいくつかの分析において細部のつめの必要が残されてもいる。これらは今後の課題といえよう。しかしながら、本論は従来の研究において十分に明らかとされてこなかった領域に深く分析を加え、大陸側の地域的様相を明らかにした研究として、今後の学会における研究動向に寄与するところは少なくないと評価できる。